

短歌を導入した日本語の教室活動

— 日本語のリズム感を身につけよう —

北島 徹

一 短歌とは

うたの本質と効用

やまとうたは、人の心を種として、万づの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼 神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

〔古今和歌集〕仮名序

やまとうたは、人の心が種となって、そこから無数の言葉となったものなのである。この世に住んでいる人は、いろいろなことや動きが頻繁にあるものなので、心に思うことを、見るもの聞くものに託して言い表すのである。花で鳴く鶯、水に住んでいる蛙の声を聞けば、生あるものすべて、どれが歌を詠まないだろう。力をも入れないで天地を動かし、目に見えない妖怪や神をも感動させ、男女の仲をもよくし、勇猛な武士の心をも慰めるのが歌なのである。

形 … 五・七・五・七・七 (計三十一音 短歌を「みそひと文字」とも言う。)

定型詩…短歌、俳句、川柳(せんりゆう)、旋頭歌(せどうか)など

俳句・川柳は五七五、旋頭歌は五七七七七。

五||原則ひらがな五文字||五拍。(漢詩の五言は漢字五字で五拍)

七||原則ひらがな七文字||七拍。(拗音「きゃ・きゅ・きよ」などは二文字で一拍。)

文体… 口語体でも文語体でもよい。外来語を入れることも可能。

内容… 自然(動物・植物・四季)や人事(恋・別れ・生老病死・生活・社会)に対する思いを

うたう。

a 季節・自然

芒(すすき)の穂風に揺られて身を伸ばし君も見てるの? 十五夜の月

ほろほろと散りゆく桜世の中のはかないことを哀れむように

千切れ雲朝日を受けて輝けば山より野へと光駆け来る

b 恋

夏影を残す小道のせせらぎに君のことばを拾いつつ行く

我もほしや老いらくの恋夕焼けのやうに美しくやさしき恋を

熱烈な燃える恋文呑み込んでポストはぼくの人生を知る

c 生活

お隣のお皿の数をちらり見て見栄で争う回転寿司屋

ティッシュを噛む一歳次男に都度叫ぶ「ヤギじゃないのよ紙は食べるな」

たつぷりとパレットに絵の具絞りつけ故郷の山しみじみと描く

d 社会問題

日本人よへこたれないで悲しみの倍の喜び返ってくるまで

美しき大和の国の一日も早い復興ひたすら祈る

家もなく親無く子なき人思えば朝のコーヒー飲むをためらう

二 短歌を学び、作ることの効果

a 日本の言語文化への関心を高める

b 日本語のリズム感を身につける

c 言語による表現の楽しさを味わう

d 身の回りの人・自然・物・事を慈しみ大切にすることを養う

正月の雨疎ましきものなれど田は潤うと片や思えり

ベランダのここにも小さな命あり風に背伸びのピンクの花の

軽やかに揺れてやさしく和やかに歌う風鈴風のともだち

三 短歌の実作

短歌の基礎知識

数え方

全体 一首、二首と数える。(一句、二句と数えるのは俳句、川柳。)

部分 初句(第一句)・第二句・第三句・第四句・結句(第五句)

上の句かみ(一く二句、または一く三句) 下の句しも(三く五句、または四く五句)

表記 漢字仮名(平仮名・片仮名)交じりで書く。仮名は旧仮名遣いか新仮名遣いのどちらかに統一する。句ごとの分かち書きをせず、一首全体を一行で書くのが原則。

用語

区切れ 一首の中にある内容的な切れ目のこと。現在の短歌は基本的に初句切れを避ける。

字余り・字足らず 各句の音数が定型より多かったり少なかったりすること。初句の字余り

は許容されるが、他の句ではなるべく避けた方がよい。